

【聞き取り票】

ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう

2013年12月

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、不安と苦しみを抱えながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じての命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”“ふたたび被爆者をつくるな”の声を広げてきました。

平和を求める世界の人々と手をつなぎ、地球上から核兵器をなくすためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに共有する人びとの輪をさらに広げていかなければなりません。

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者とヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐことを呼びかけます。被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいきましょう。

そして取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していきましょう。

[証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)]

記入年月日	2014年2月10日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	服部 道子 (はっとり みちこ)	性別	1. 男 2. 女
生年月日	明・大・昭 4年 月 日 (被爆時年齢 16歳)		
現住所			
被爆地	1. 広島 2. 長崎 [町名 距離 . km]		
手帳区分	1. 直爆 2. 入市 3. 救護 4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] 6. 被爆者の子・孫 7. その他		
氏名の公表の可否	1. 可 2. 不可		

1. 被爆したときのことをお聞かせください。

被爆時、年齢が幼くて当時の記憶がない方(被爆二・三世の方)は自分が被爆者(被爆二・三世)であることを、いつ、どのようにして知りましたか。

* 2013年7月2日の聞き取り票参照

2. その後の人生についてお聞かせください。

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

原爆から終戦までの間は軍の兵舎を貸してもらって私たちはそこで生活をしていました。母親が勤労働員を近所の奥さんに代わってもらって、それでその奥さんが大やけどをすることになって、隣組には居ずらいからということになって。軍の兵舎に住めたのは、父親が佐官待遇だったものですから特別のことだったと思います。

終戦後、軍から東京はアメリカ兵、広島にはソ連兵が入る。占領されたら女子供は八つ裂きにされるから山奥に逃げるようにと言われていました。ところが私たちは東京の蒲田の家は空襲で焼けているし、行くところがない。しょうがなくて父親の遠い親戚が弘前にいるので、そこに行こうということになりました。

終戦からちょうど1か月、9月15日に広島を脱出しました。

飯盒、水筒、そういったものもかっぱらい、強盗ですね、盗られてしまう。だからおにぎりを甕に入れて、そのおにぎりも麦もないから高粱のおにぎりです。水筒も軍用のいい水筒を父親は持っていたんですが、それも盗られるというので一升瓶に水を入れて。リュックも盗られるというので貴重品は風呂敷に包んで背負って広島駅に行きました。

広島駅は復員で帰る兵隊でいっぱいでした。汽車には兵隊が鈴なりで、屋根の上や窓にまでしがみついている。到底、私たちは一緒には乗れない。そうかといって家族バラバラで脱出はできない。結局、家族で貨車に乗ることになりました。貨車と言っても箱型の石炭が積まれる貨車で屋根がないんです。その石炭も粉のような石炭です。その上に兵隊が10人くらい乗っているところに私たち家族も乗り大阪の方を目指しました。

汽車ですからトンネルを抜ける時は息ができない。風呂敷で顔を覆ったり、いちばん困ったのはおしっこです。いつ出発して、いつ止まるのかもわからない。男はいいでしょうけれど、私とお母さんと妹がいて、妹は12歳、私は16歳、母親も40歳ちょっとです。恥ずかしいんですけど、いつ出発するか分からないから貨車から降りることができない。だから風呂敷で囲いながら甕に私たちはおしっこをしました。広島から大阪まで行くのに3日かかりました。

大阪では炊き出しがありました。軍から証明証をもらっていますから、私たち家族は兵隊と同じように炊き出しをもらうことができたんです。一般の人はもらえない。その時のおにぎり

がおいしかったのを覚えています。そのおにぎりには高粱ではなく麦が入っていました。

大阪も焼けていますし、浮浪者があちこちにおいて、隙あらば盗ろうとしていて荷物を置いておけない。私たちもどこで取られたかはわからないけれど、広島を出る時にもらった罹災証明が青森に着いた時には無くなっていました。

大阪からは馬と一緒に貨車に乗ることになりました。兵隊3人と馬3頭。馬一頭に兵隊がひとりずつついてるんです。馬も復員兵と同じで故郷に返すわけで。その貨車に父親と母親と、妹と弟と私、家族5人で乗ったわけです。蠟燭を持っていましたが火をつけると馬が暴れるので、片隅で小さな明かりを灯して旅をしました。大阪から京都。京都からは新潟の方を目指しました。新潟に着くと沖合に船が見えるんです。それはロシアの船だから気を付けなくては行けないと言われ、終戦になっているのに灯火管制をして避難をしました。

新潟にいる時に、あれは9月の終り頃だったと思います。台風が来るというので、今度は横断して仙台の方に出ようということになりました。台風が福島で合いました。あれはつらいかったです。兵隊さんたちと持っているものを分かち合いながら過ごしました。仙台に着くのに半月ぐらいかかったと思います。

仙台から岩手を通って青森に向かったんですが、私のそばに私より二歳くらい年下の汚い恰好をした男の子が、浮浪児だと思うんですけど私に抱きつくんです。混んでしまっているの親とは離れ離れになってしまっていて、私は逃げたいんだけど逃げるのができない。怖かったです。叫べないし、人さまにも言えない。まだ16歳ですから周りの兵隊さんに助けてとも言えない。我慢していました。

青森の手前の浅虫というところで列車が止まってしまいました。「海の方を見てごらん」と言われ、見てみるときれいな船がある。それはアメリカの船なんです。そして着ているもので列車の窓から明かりが漏れないように灯火管制をしろって。もう負けたんだからそんなことをしなくてもと腹の中で思いましたよ。

そうやって弘前にたどり着いたんですが、青森が空襲で焼けて焼け野原で、その被災者でいっぱい弘前には住むところがない。親戚の家もいっぱいなんです。そうして私たちを広島から乞食が来たって言う。そうですよね、お風呂も入っていないくて真っ黒けだし。列車で浮浪者からシラミをもらっちゃって、それが痒くて痒くて。ひどい目に遭いました。

弘前では住むところがなくて旅館生活です。旅館生活をしたんですけど食べるものは決まっている。ちょうど預金封鎖で300円以上持てない。そのお金で旅館にお金を払って。たしか竹輪が一つ1円でした。お昼はそれを食べるのがやっとで、竹輪を並んで食べるんですけど、おいしかったのを覚えています。

シラミはお酢で殺すのがいちばんだというけれどお金もないし、うっかりシラミがいることが旅館にわかったら追い出されてしまう。我慢しながらみんなでシラミを潰して、そんな生活でした。

弘前にはリンゴがいっぱいあって台風でリンゴがみんな落っこちていたのね。朝早く妹と弟を連れて散歩に行き、そのリンゴ畑に行き落ちていたリンゴを拾って食べました。私の家は拾ったものを食べたり、人から恵んでもらってはいけないという教育を受けていたんです。そんなことをしたら怒られる。でも、ひもじさには敵わないんです。落ちていたリンゴを服で拭いて弟に与えました。弟はかじって、おいしいねって。私も食べました。おいしかったです。弟は「お姉ちゃん、また明日来ようね」って言うんです。「絶対にお父さんやお母さんには言っちゃいけないよ」って堅い約束をして。そういう旅館生活をしていました。

母親にはたくさん兄弟がいて、五番目の男の子が水産学校を出て、優秀なもんですから青森の〇〇というところに養子に行かないかと校長先生に言われて、それで口減らしではないですけど、そこに養子に行っていました。その一人娘と結婚して。そのお店はすごく流行っていて漁船を何十隻も持っていて、ソ連の方に漁船を出したり、すごく景気がいいんですよ。やむを得ないからそこへ訪ねていこうと一家で八戸に訪ねて行ったんです。

そうしたら玄関払いですよ。乞食が来たって。母親がね、みんな着の身着のままだし、お父さんも怪我をして左手を吊っていました。そしてみんなが下痢をしていました。私も嘔吐したり、そういう状態だからどんな部屋でもいいから貸してほしい。納屋でも何でもいいから住まわせてくれって頼みこんだんです。それでもダメだと言うんです。養子に来た身だし、とにかく旅館だけ世話をするというので旅館にお世話になりました。

そうしたら、その家の女中が3人、五重のお重を持って来て、白米のご飯とお魚、それからかまぼこ、卵焼き、私たちが何年も食べたことがないようなご馳走です。お重には手紙が付いていました。その手紙には、これを食べたらすぐにこの土地から出て行ってくれ。商売の妨げになると書かれていました。みんなで泣きました。それっきり私は叔父を叔父だとは思っていません。そういうときこそ助け合うのが人間じゃないかと思うんです。そういう冷たい目にも遭いました。

行くところがなく困って母が手紙を里に出しました。里も蒲田でしたが空襲で焼けましたでしょう。それで母の両親は宮城県の大張村に、息子が使っていた人を頼って住んでいました。だから肩身が狭いんです。あまり裕福な村ではなかったんですが、〇〇からお魚とかを送ってもらっていて、それをお米やお野菜と交換してどうにか生活していました。

母が「八戸まで来たけど追われている」と手紙を出したら、道子だけ面倒をみるという電報が旅館に届きました。それが電報屋さんの一字間違いで「ミナココイ、メンドウミル」。本当は「ミチココイ、メンドウミル」だったんですが。それでみんな喜んで訪ねて行ってしまった。そうしたら、お爺さんとお婆さんはびっくりしてしまっただけで、でもね、追い返すわけにはいかない。お爺さんとお婆さんも一部屋しか借りていない。それで蚕小屋を借りてくれました。それで私たちはそこに住めたんです。それが暮れの12月でした。

お父さんは疲れてやつれてしまっただけで、私たちも安心してしまったのか身体がだるいし吐く、下痢するでどうしようもない状態でした。そこは無医村でしたから医者にもかかれなかった。私た

ちは持っているもの、着ているものを売って毎日を過ごしました。交換してもらうものはジャガイモ。それも、あまりいい土地ではないものですから梅干しみたいな大きで。それを頂いて囲炉裏にくべて焼いて食べました。それから干し柿。その干し柿の皮を干したものを石臼で引きますと、きなこのようになって、その粉が甘いんです。父の禪を洗濯して干します。下痢をしているから6枚くらい干すんです。そうすると村の人が譲ってくれと言ってきます。禪3枚でお茶碗一杯のお米です。そのお米を伸ばして、大根の葉やハコベを刻んで入れたりして食べました。

私は戦争中よりも戦後の方が辛かった。戦争中は父親が軍隊にいましたから、お砂糖だとかおみかんだとか届くんです。戦争中は一般には切符だとか配給だとかでサンマー匹を5人で分けるような生活でしたが、軍隊からみかんが一箱届いたり。家に公用という腕章を付けた兵隊が来て、玄関先で敬礼して「服部殿のお宅ですか。ただいま砂糖を2kg持ってまいりました」とか声を出して言わなくてもいいこと大きな声で言うんです。そうするとね、近所の人が「服部さんのところは特別扱いだ」。軍にいたからいいこともある反面、そういう偏見が隣組の中にありました。それでいて「服部さん、砂糖を少し分けてください」とか。

それから後、蚕小屋にもいられなくなって郷倉という、これは米蔵なんです、そこが空だったので、そこを借りて住むことになりました。そこは電気もガスも水道もないんです。お水は桶で前の家までもらいに行き、お米は川の水で研ぐような生活でした。元気ならばいいのですが、私たちは病気がちでお父さんも下痢をしている。

そういう生活をしていると、もっているお金も知れています。どんどん減っていくのでお父さんが焦ってね、身体が悪いのに雪の降る中、干し柿の粉を東京に持って行って売ると言うんです。大張村は白石から4kmほど離れた山の中でバスが一日に一本しかなく、雪の日はそのバスもないんです。

父はその粉を3kgくらい買ってリュックに入れて東京に行くと言って聞かない。雪が降っていてバスもないからおやめなさいと母は止めるんですが、それでも行くというんです。「道子、悪いけれど駅まで送ってくれないか。どこかで馬車が来たら載せてもらえばいいから」と言われ出かけましたが、雪がどんどん降ってきてしまって、馬車なんか来ないんです。行けども行けども雪が降っている。道をとうとう3kgの柿の粉を背負って白石まで父を送ってしまいました。その日は朝の7時頃に家を出たんです。そして白石の駅まで行って切符を買って、お父さんを東京行の汽車に乗せ、私一人でご飯も食べずに帰る始末。「道子、ご飯もたべさせないで悪かったな。時間がないからお前はすぐに帰れ」と言われ、ひとりで来た道を帰りました。その時の辛かったこと。お父さんの長靴を借りて履き替えて歩きましたが、雪が降り積もって長靴の中に入ってくる。その道には私とお父さんお足跡しかないんです。山の中ですから3時、4時になると暗くなってくる。はるか遠くに明かりが見えると狐火じゃないかって。雪が重たくて足が抜けない。雪道には狐が横ぎった足跡があります。そうすると狐に化かされないようにしなくっちゃって思ったり。帰ったのは真っ暗になってからで、郷倉が見えたときには疲れて一步も歩けなくなっていました。

父親は東京に行きましたが昔の人間ですから売ることができないんです。みんな親戚の東京の家に置いてきてしまって一銭にもならない。2回、3回と父親は東京に行きましたが一銭もお金になりませんでした。

そうして4月、父は床についてしまいました。無医村でしたが田端から疎開したお医者さんが隣村にあったので、そのお医者さんを迎えに行きました。迎えに行つて診てもらうのに馬を仕立てて、往復八里ですよ。そういうことをしてお父さんを診てもらったら、

「なんだこれは。血便が出ているじゃないか」

「吐いたものを見せて」

そして

「これはチフスじゃないか！」

「おまえたちはどうなんだ。」

私も下痢をしています。

「それじゃあ、一家みんなチフスじゃないか。隔離しなくちゃ！」

「こんなところに置いておけない。でも今は隔離できるような状況じゃあない。」

それで、どうしたらいいんだろうと言うんです。どうしたらいいんだろういと聞かれても、私たちも困まる。

「とにかくお薬をください。」

「そんな腸チフスに効くような薬なんかない。」

とにかく薬をだすから来いと言われて、私が一緒についていってお薬をもらって帰りました。

そうして2、3回医者に見てもらいましたが、4月19日の朝です。父が「道子、鏡を見せろ」と言うんです。お父さん、鏡を見ちゃダメと言ったんですけど、どうしても見たいというので見せたら、「俺はもう死相が現れた。もうダメだ。おまえは長女で辛い思いをさせたけど母親と妹、弟を頼むな」って。遺言ですよ。そのころには髪の毛がバサッて束になって抜ける、そして顔にブツブツ紫の斑点ができました。そして重湯を一口食べて、それからやっと手に入ったリンゴを母が摺って、それをちょこっと食べて死んでいきました。

その土地には寝棺がなく座棺といって四角いお棺なんです。お父さんを四角いお棺に座らせて、それをリヤカーに積んで、母と土地の人が白石に焼に行きました。私は家で留守番をしていました。今でも私、かわいそうだったな。父を寝かせてあげたかったな、と思うんです。父のお骨を持ってきたときに土地の人が、なんだ電気がなかったのかと言って、そのあと電気だけは引いてくれました。電気はつきましたがトイレは相変わらず上の家で、新聞紙もなく柿の葉で拭くんです。それほど物が無い。そういう生活をしていました。

父が亡くなったあともその村に住んでいましたが、村の若者が私をめぐりて来るんですよ。でも私は男女は七歳にして席を同じくせず、という教育を受けていたんで拒否をしていました。看護を少し勉強していたので役場の診療所で働くことになりました。そこには週に2回ほど

若いお医者さんが白石から来るんです。ですけれど若い先生より私の方が注射もうまいし、包帯も上手なんです。経験を重ねているからね。村の人が鎌で切ったと傷口にニラを貼って来るんです。それを上手に治療してあげると、私の方が上手だと評判がいい。そうしましたら明るる年に辞めてくれって言われました。やればやるほど反発を食ってしまうんです。それで時にはバカでいた方がいいということを感じました。

そうしたら今度は福島の方で教員が足りないから行かないかということになって、宮城県から福島県に移ることになったんです。母は教員資格を持っていたんです。母は関東大震災の時に聖路加病院がフランスからテントをもらって、そこで孤児をみていた当時はちょっと有名人だったんです。そんな関係で母親に金谷川の小学校に空きがあるから、その分教場を任せるから分教場の先生をしてくれということになって。1～3年生を受け持って、私は代用教員で本校の3年生をみなさいということで、1年間本校に通ったりもしました。

分教場の思い出はアメリカが学校に脱脂粉乳をたくさんくれたことです。本当に田舎の人もみんな栄養失調でガリガリでした。脱脂粉乳を大きな釜でみんなに飲ませたんです。唯一の栄養源でした。アメリカでは捨てるようなミルクだというけれど日本人はみんな助かりました。こっぺぱんと脱脂粉乳を子どもたちといただきました。そこでもシラミが出てDDTをまいたり、私もバリカンで頭を刈ってやったりしました。

そこで3年生を教えていた時に倦怠感があって、一生懸命授業をした後は伏してしまうような状態で。教員というのは授業の後にも職員会議があったりカリキュラムを作ったりする仕事があるんですが、そういうことができないんです。子どもが帰った後でいつも突っ伏して職員会議にも出られない。そうしたら服部は怠け者だと散々非難されるんです。医者に行って、こっそり被爆者だということと言っても、医者もそういうことを知らない、わからない。本当にひとり苦勞しました。蚊に刺されても、そこが化膿してしまう。そういうことで困りました。

父が亡くなって、家族を食べさせるために教員になろうと私は8月に福島で教員試験を受けることにしました。他の人はみんなは金谷川から乗るんですけど、私は松川から乗らなくてはならない。そうして松川の駅に行こうとしたら松川事件ですよ。それで私の人生はまた変わってしまった。松川で汽車が転覆して二人くらい人がヒーヒー言っている。それを助けなきゃって。機関車が燃えている。結局その二人は亡くなりました。その後、警察から被爆者だということで、何か知っているのではないかと疑われ辛かったです。それで私の教員生活は終わってしまいました。

苦しんで、村八分にはされるし、乞食をしても東京に出た方がいいのかなと思って、東京に出てきたんですが、東京に来て住む家はないし、親戚を訪ねても追い出されて、芝公園でおトイレを借りて、新橋から銀座を毎晩、アメリカの兵隊がパン助と歩いている街をさ迷い歩いたりしました。

弟が病気になってしまって、薬欲しさに花売りをしようというんで、妹と花を千円で10本

買いました。でも買って下さいと言えなくて一本しか買ってもらえなくて900円はパーです。あれも縄張りがあるんですね。アメリカのジョージという兵隊が銀座を縄張りにしていて、ここで商売をしてはダメだというんです。いくらお金払えばいいんでしょうけれど、そういうことも知らなくて花売りは二日で辞めました。そういうことまでしたんです。辛い思い出しましたよ。

ですから戦争はしてはいけないということにつながるんです。みじめな思いをするのは一般の人たちなんです。上の人たちはふんぞり返って指揮だけしていればいいんですけど、犠牲になるのは一般の人たち、子どもたちです。私も何度死のうと思ったかしれません。家族がいなければ死んでいたと思います。お父さんから、母親と妹、弟を頼むなと言われた、その一言があったから今まで生きてきました。生きていたからこそ、こうやって皆さんとお話もできます。とにかくあの時に亡くなった方のあの形相、死にたくなかった辛さ、それをみんなに知らせたい。私も84歳、あと3ヵ月で85歳になりますけれど、生かされたこの命を大切に死ねまで語り継いでいきたいと思います。事実を学んでもらえば、学べば学ぶほど核とか戦争がいけないことだということがわかると思うんです。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？

1. 可 2. 不可

【原稿確認時の服部さんからの追記】

弟は1931年（昭和6年）満州事変後、私より2年後に誕生しました。

私の先祖は忍者、服部半蔵の子孫です。服部家に男子誕生とのこと、大喜びでした。ただし一年未満で消化不良で入院、高熱におかされ死を宣言され、父は全財産をなげうっても助けたいと、注射や薬を与えたそうです。その結果、命はあったものの発達が遅れ7歳まで歩けませんでした。その後、知能の遅れはありましたが身体に不自由はありませんでした。現在のように福祉が発達しておらず苦労はしましたが、他人さまには可愛がられ、好かれて過ごしました。

原爆の時は14歳、防空壕兼用にもなっている押し入れに首を突っ込んで玩具で遊んでいたそうがかすり傷で済みました。

8月6日は弟がおねしょをしてしまったために2階のベランダ（皆実町3丁目1014の3番地）に干した布団80cm四方（濡れたところ）が焼け焦げていました。このことを厚生労働省の役人に証言しても、写真はあるか、現物証拠はあるか言われます。戦争当時を知らない役人には理解してもらえませんでした。広島を脱出した際に物が不足していたので大切な布団、きな臭いけれど持ち歩き宮城県伊具郡で父が死んだときに山の畠で燃やしました。あの時世、カメラなど持っていたら憲兵に引っ張られました。事実を語っても役人たちは当時のことを学ばず、学ぼうともしないことに憤りを感じています。

弟は1961年（昭和36年）交通事故で死亡しました。

【聞き取りをおこなった方の記入欄】

聞き取り日時	2013年12月14日(土) ~	場所	レン会議室新御茶ノ水
聞き取りをされたのは	1. 個人 2. グループ [名称:ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい]		
聞き取り票記入者	島村雅人	TEL/メール	Shimamura_kiokuisan@yahoo.co.jp
連絡先住所等	〒102-0085 東京都千代田区六番町15プラザエフ6F ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会		

4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

【ディスカッションの様子】参加者7名（被爆者2名 ■）

司会：服部さんには戦後の話を中心にお話していただきました。その中でいちばん印象に残ったこと、感じたことを順番にお願いします。

■：まだ戦いは残っています。認定訴訟だけではないと思います。熱線、爆風、放射線が複合して被害として出たんです。原爆被害の全体を国に認めさせなくてはならない。まだ戦うことはたくさんあるんです。だから長生きしましょうよ。

□：被爆したときの体験は聞く機会があっても、その後の話はなかなか聞けなくてはお聞きして、どれもこれもびっくりでした。私も親戚が弘前にいて両親が福島ですから、あの辺は寒いし、今は雪が少ないけれど豪雪地帯ですし、相当大変だったと想像がつかます。ほんとうにお会いできてお話ができてよかったです。

□：私は終戦が台湾でしたが引き揚げてきてからは服部さんのような苦労はしていません。父方が名古屋近郊の農家の末っ子だったので、昔の本家があって、本家の農機具小屋を改造してそこで生活していました。食べ物とか、そういう点での苦労は初めて聞きました。ただ台湾からこっちへ来る間とか向こうでの食べ物、何もなくてね。そういうひもじい体験は共通しています。

亡くなった彼は広島一中で、やっぱり学徒動員で出ていて2.5kmぐらいのところで自分の親と妹がいて、その辺をうろうろして火が迫ってきたから逃げたという話は聞いているんです。彼も広島から早く出ようと思って卒業した後、大阪の方の学校に行って資格を取って愛知県に来て。あと教員免許があったからそれで生活してきたみたいですが、やはり黙っていたみたい。黙っていて原水爆禁止世界大会に出て被爆者の運動があることを知って、それから被爆者運動に加わって。

最近、彼がどういう活動をしてきたかということ、原水協と平和委員会、被団協、それから愛知県のこととか。愛知の被爆者たちも黙っていたけれど、80歳近くなって黙っておられないということで話したいという人がボチボチ出てきているんです。行ける時は愛友会に新聞発送の手伝いに行くんですけど、そこに来る人は被爆の記憶がない人たちで、そういう人たちは自治体行脚、語り部に行っても体験がない、記憶がない。

司会：それは幼すぎて覚えていないということですか。

□：そうですね。だからあなた被爆者だよと周りの人から聞いて、手帳をとるのに50年かかったとか、いろいろな人がいるんです。今は一対一ではなく、こういうグループだと話しやすいということで、そういうことを愛知ではやり始めているところです。愛知県では被爆者が手分けをして毎年自治体を訪問していて、今年は55でしたか。被爆者が来て生の話をすると行政の方も緊張感が違うんです。これを引き継ぐために生の証言を中学校で話させてくださいとか、新しいパネルを買ってみんなに広げてくださいとか。そういう中である市では中学二年生全員が市のお金で広島に行く、修学旅行とは別にね。そういう自治体も出ているんです。被爆者の生の証言は一言二言でも大切だなって。服部さんのことは今日話されたことしか知らないで、服部さんのそのあとのことも聞きたいと思いました。

司会：お父さんの他に服部さんのご家族で亡くなられた方はいらっしゃるんですか。

服部：弟は交通事故で亡くなりました。妹は今年2月に大腸がんで死にそうになって。奇跡的に生きていますけれどね。妹は何でもなかったんだと話していたんです。妹は学童疎開をしていたの。それを私と父が迎えに行ったんです。先生が帰せないというのを軍にいたし父親は頑固ですので。妹は12歳だったんですが、父親が風呂敷をかぶせて見せないようにして帰ってきました。それが9日。

市内を通過して迎えに行く間に死体も見ましたよ。9日の朝に出て妹を連れて帰ったのは夜でした。その晩、皆実町の家庭に埋めてあったお米と缶詰を掘り出して晚餐をして、お父さんが死ぬときはきれいに死ねよと言いました。妹は9日に帰ったので何でもないと考えていたけれど、今年の2月に大腸がんになって。

司会：服部さんが語り部をはじめたのは幾つぐらいの時に、どんなきっかけだったんですか。

服部：私は孫が生まれたときに、遺伝というのはひとつおいて出るから気をつけろと言うでしょう。それが五体満足で生まれたから、(聴取不能)最初に毎日新聞の大阪支社の記者が私のところに来て、それが新聞に出たんです。それを京都の友だちが読んで、これは服部さんのことだって。それがひろがっちゃってあっちの報道、こっちの報道と聞きに来るから、やっぱり言うべきことは言わなくちゃいけないなっと思って。子どもには話しませんでしたよ。被爆

者だということは話しても詳しいことは話していませんでしたよ。あの日のことを記者にお話して、それがあちこちに広がってしまったんです。そうしたら、広島にいる女学校時代の友だちに、広島に行った時に、服部さんは最近ようしゃべるとるねって批判を受けました。あなたは死んだといってもお父さんだけでしょう。私なんかしゃべれんわって。でも、その人が一昨年、広島に行った時に、私も服部さんにあんなことを言ったけれど、今はしゃべっていますって。

司会：ここで7月にコープネット埼玉エリアで行った聞き取りの記録をお配りします。この中で、服部さんは「日本政府に対して被爆者だけではなく東京大空襲などの一般空襲の被害者、沖縄戦の非戦闘員の被害も補償してほしい」とお話になっていますが、そのことについてもう少しお話いただければと思います。

服部：確か第6回目の原水禁世界大会だったと思うんですけど、蕨から行ってくれと言われて参加したんです。その時に参加して分科会で被爆者の話が合って原水協の取り組みについて話があったんですけど、私は何も知らないものだから手を挙げて「戦争被害は広島はもちろんだけれども、東京にも空襲があった。それだけではなくて内地のあちこちで空襲があったし、沖縄戦でも親や子どもが犠牲になって死んだでしょう。そういう人たちと一緒に、みんなで腕を組んで政府に申し立てをしよう」と言ったの。そうしたらね、「今はそんなことより被爆者のことをやっているんだ」と、こうきたの。それを聞いて私は2度と行くまいってずっと拒否していたの。

■：いつごろ。

服部：6回です。

■：じゃあ分裂する前だ。その頃はいろいろな人たちが参加していたから、被爆者の話をしようとしたら、「そんなこと、ここで話すもんじゃない！」と会場から声が飛んで止められたんです。運動の流れは様々なことがありながら、被爆者は一致して分裂せずにやってきたんです。

我々是一緒にやりたいと思っているけれど、残念ながら空襲の被害者は全国に散らばっているでしょう。それがまとまらない。やっと2年くらい前からまとまってきた。今まではできなかった。

服部：今から2年前でしょう。それが遅いと言うのよ。

■：これはね、自分らが自覚して起たないと運動にならないんですよ。空襲、さらに今はフクシマ。フクシマの人たちは今ね、起たないんですよ。不安でしょう。どうやったらいいかわ

からないのね。あの人たちも一緒にやらなくてはならないんだけど、こちらからそれを言うと、「なんだ、お前らはいろいろなものをもらっているくせに。」そういう反論が出てくる。そういう難しさがある。だけど核時代の戦争の被害、核被害だけど、それをどうやっていくかが今の問題だと思うんです。考えなくてはいけない。

□：今裁判を起こしている女の方がいらっしゃるの。その方は被爆者だけど結婚して子どももいて、ご主人は亡くなられているけど、ずっと被爆者だということは黙ってきた。でもフクシマのことを知って、黙っていたらあの人たちが私たちみたいになるからと、私の病気を放射能だと認めてくださいと。

■：私たちの内部被爆を国は認めてこなかった。

服部：息子が成長期に脱臼で腰が外れそうになって手術して9ヵ月、東邦医大で。それが先天性のものだというんです。家は先天性でそういうことになったものは誰もいないんです。でも50歳になって痛みが出てきて。でも国は原爆のせいだとは認めないですから。

□：僕は日本と韓国、朝鮮の友好の運動をしていますが、韓国に広島で被爆した人がたくさんおられます。陝川（ハプチョン）というところに特別たくさんおられるんです。そこへ行ったら、今のお話しはるのと同じで三世、四世、五世くらいの人たちまで、早い人は死にますけれども、元気な人は大きくなりますわね。そうすると今言うところのような病気がいっぱい出て。その町では放射能の影響は遺伝するんだということを証明しろ言うて裁判してはる。韓国の国会も動かしてやりでしていますね。

司会：時間になりますので、今日のような取り組みを埼玉でも引き続き取り組んでいただければと思いますし、今日のように前回のお話を記録した聞き取り票と合わせて、その後の話をお聞きするというのも初めてだと思います。こうした記録の取り方、使い方も、さらにみなさんのところで創意工夫していただければと思います。被爆の証言を聞くときに「同じ方から何回も話を聞くことも大切です」と言葉にすると簡単ですが、それがどういうことなのかはなかなか実感できないと思います。それで、今回はあえて服部さんには「あの日」のことではなく、その後のことを中心に語っていただきました。今日は証言の時間で1時間、ディスカッションで1時間ありましたけれど、実際にやってみると時間が足りないんですね。

■：それはね、原爆被害、戦争被害と言うのは一回聞いただけではわからない。時間をかけないと話せないし、話す間に被爆者自身も勉強になって、そういうこともあった思い出なんです。ですから被爆者からの聞き取り、語り継ぎというのは何回も集まって膝を突き合わせて話し合うことが大切だと思うんです。そういうことをこれからやっていかななくてはならないと思います。難しいことではあるんですが。

□：すでにお話を聞こうとする方が手記なり本なり書いている場合はどうすればいいんでしょうね。

服部：私も書いた。今日は重いから持ってこなかったけど。

□：それぞれいろいろだと思います。服部さんのように一度では全部語れない、そのことが手記なりでわかれば今回のように2回に分けて話をお聞きするという配慮をすることもできます。それと聞き書き証言集を出すときにテープから起こした原稿を確認のために本人にお送りすると、この部分は載せないでくださいということが少なくありません。それがその人の体験の核心部分だったりすることもあります。手記や本に書かれていることが全てではないんだとそれで学びました。

<返送先> 〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

電話/FAX03-5216-7757 Email: hironaga8689@gmail.com